

主 題：うそにあふれた世界

聖書箇所：詩篇 12篇

テーマ：うそにあふれる世界にあって私たちが信頼することができるものとは？

今朝もこうして詩篇から私たちの偉大な神様がどのようなお方なのか、そして私たちが神様にあってどのような歩みができるのかを皆さんとともに学べることを心から感謝しています。

詩篇12篇 指揮者のために。八弦の立琴に合わせて。ダビデの賛歌

:1 主よ。お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子らの中から消え去りました。

:2 人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。

:3 主が、へつらいのくちびると傲慢の舌とを、ことごとく断ち切ってくださいますように。

:4 彼らはこう言うのです。「われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。」

:5 主は仰せられる。「悩む人が踏みにじられ、貧しい人が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう。」

:6 主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。

:7 あなたが、主よ、彼らをお守りになります。あなたはこの時代からとこしえまでも彼らを保たれます。

:8 人の子の間で、卑しいことがあがめられているときには、悪者が、至る所で横行します。

思い出せば、すべての始まりはこのことばでした。創世記3：4-5「蛇は女に言った。『あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。』」。神様の真理をねじ曲げ、偽りのことばを語ったサタンにだまされたアダムとエバが神様に逆らったことによって、神様の造ったすばらしい完璧な世界は壊れてしまいました。本来聞き従うべき神様のことばに従うのではなく、神様を否定することばに耳を傾けてしまったがゆえに、この世界のすべては罪に汚染されてしまいました。そしてその日以来私たちの世界には人を惑わします、うそや偽り、人を直接または間接的に傷つける暴言や噂話、ゴシップというような悪意に満ちたことばが横行していることを私たちは見ることができます。テレビやニュースを見れば、間違っていること、正しくないことがあたかも真実のように語られていたり、政治や経済、社会情勢といったさまざまな出来事のほんの一部分だけを切り取って、それが事実かどうかはさて置き、話題性があるからとか、それが人々の関心を引くからといった理由で報道されていたりします。そして私たちはある時は多くの人々がAだと言っているからAにしよう、またある時はBが自分には最も納得できるからBにしようと、周りにあふれている数多くの情報、また人々のさまざまな考え方やことばに惑わされ、だまされていたりします。その結果、一体どこに真実があるのだろう、何を信じればいいのかと思う悩むことがあります。

また、ことばの問題は私たちの周りの社会でだけ起こっているわけではありません。私たちが自分自身を見つめてみれば、例えば友人や家族、職場の同僚やアパートの隣人といった人々との間において、また同じ主を愛する兄弟姉妹との間にあって自分自身が発することばが原因となって関係を傷つけてしまうことがあったりします。人を悲しませるうそをついたり、人を傷つけ怒らせる、そんな悪意に満ちたことばを発してしまったり、相手を思いやる気持ちの一切ないようなことばを発してしまったり。そんなつもりはなかったのですと言って、ふと口に出てきたものが人と人との間に争いを引き起こしてしまうことを私たちは皆経験したことがあるはずです。また私たちは信頼していた友人や信頼していた人の何気ないことばを耳にしたことがきっかけで、信頼が崩れ去ってしまうようなことも時にあります。誰かが陰で自分のことを噂しているというようなことが耳に入ろうものなら、突如として私たちの心がざわついたり、不安や恐れを抱いてしまったり、まるで自分以外のすべての人が自分を悪く言っているかのような孤独感を覚えるということもあります。周りに信頼できる者がいなくなって、何を信じればいいのかかわからなくなりパニックに陥ってしまった経験をしたことがある人もおられるかもしれません。自分の周りは心を悲しませるようなうそであふれている。こんな状況の中であって、一体何を信頼することができるのだろう、こんな思いをこれまでに抱いたことはないでしょうか？

もし、そのような状況に心当たりがあれば、また今まさにそのような状況の中におられるのであれば、またこれから先そのような状況に出くわすことがあるのだとすれば、今回見る詩篇12篇は私たちに確かな希望を教えてください。なぜならこの詩篇を記したダビデこそがまさにそのような状況の中に置かれていたからでした。具体的な歴史的背景についてはわかっているかもしれませんが、さっき読

んだみことばを見て私たちがはっきりと言えることは、ダビデが彼を取り囲む人々の悪意あることばによって大きな苦しみを味わっていたということです。彼の周りは互いにうそを話す者たち、本心を隠して思ってもいないことを笑顔で口にする二心の者たち、人にこびへつらう者たちであふれていました。そこには裏切りがあり、だまし合いがあり、争いが起きていたのです。貧しい者たちはしいたげられ、正しい者たちがだまされ踏みにじられる。信頼を置くことのできる者は存在していないような状況の中にダビデは置かれていました。しかし、驚くべきことに、ダビデはその中にあってなお、揺り動かされることなく希望を失うこともありませんでした。ダビデはいつもと変わることなく主に信頼して歩むことができました。

では一体なぜ彼はそのような歩みをすることができたのでしょうか。どうしてダビデは慌てふためいて不安や恐れ、また不満が心を支配することがなく、平安を持って、喜びを持って歩むことができたのでしょうか？きょうはその答えをともにこのみことばから学んでいきたいと思えます。詩篇12篇は大きく二つのことばについて見ることができます。まずダビデを苦しめることばが前半部分に出てきて、後半にダビデに希望を与えることばが出てきていることを見るすることができます。これからこの二つのことばについて見ていくのですが、皆さん自身もいま一度それぞれがどんな信仰の上に立っているのか、どんな土台の上に立っているのかということを考え直してみてください。そして、私たちも生きていうそにあふれる世界にあって、どうすれば希望を失うことなく生きていくことができるのかを改めてよく考えてみてください。このみことばが皆さんの主のみことばへの確信、主のみことばに対する喜びを増し加えるものになることを心から願っています。

A. ダビデを苦しめることば 1-4節

さて、1-4節の中でダビデが人々のことばによって苦しめられている姿を見ることができます。彼は彼を苦しめるさまざまなことばによって追い詰められていました。1節「主よ。お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子らの中から消え去りました。」と始まっていました。ダビデの叫びはシンプルなものでした。彼は彼の周りを見渡した時に「聖徒」たちが、また「誠実な」者たちがいなくなってしまうことに気づいたのです。ここに出てきている「聖徒」というのは神様の前に正しいことを行う人たちのこと。また「誠実な人」というのは神様のみことばを愛し、そのみことばに忠実に歩もうとする人たちのことを指しています。言い換えれば、彼らはダビデと同じように主を愛し、主の前を正しく歩んで行きたいという願いを持つ信頼することのできる人たちだったのです。そんな人々をダビデも信頼することができました。

しかし、そんな彼らが彼の前からいなくなってしまったのです。だからこそダビデは嘆き、「主よ。お救いください」と主の助けを切に求めていました。「主よ」、私の周りからは私の信頼する者たちがいなくなってしまうまいりました。同じ主を愛し、喜んでみことばを分かち合うことができていた者たちが消え失せてしまいました。あなたに心からの賛美をともに捧げることができた友がもういません、私はひとりになってしまいました。どうか主よ、この苦しみから助け出してください。ダビデはひとり孤独を覚え、深い悲しみの中にいました。しかし、彼をさらに苦しめていたものは彼を取り囲む数々の偽りのことばだったのです。消えて行った正しい者たちに代わって、うそをついて人をだましたり、平気で人を傷つけるようなことばを発する者たちが社会にあふれるようになってきていたのです。

1. ダビデを苦しめる者たちの四つの特徴

2-4節の中で、ダビデを苦しめる言葉を発していた者たちの四つの特徴を見ることができます。

1) うそつき

まず2節の最初のところに「人は互いにをうそ話し」と書かれています。彼らの一つ目の特徴は互いの間でうそをつくような者たちでした。私たちが「うそ」と聞くと、事実とは異なる正しくないことばや間違っているものといったことを想像されるかもしれませんが、ここで使われている「うそ」ということばは、そもそも「むだな」とか「価値のない」、「空っぽな」という意味が含まれています。要するに、この人々が話すことばはそれを聞く人に何の価値ももたらさないもの、その会話が余りにも無責任で不誠実であるがゆえに誰にも益をもたらさない空しいものだったということです。互いの間で真理を話すのではなく、うそをつき、誰の徳にもならない無価値なことばを彼らは交わしていたのです。

2) へつらい

また二つ目、2節の続きに「へつらいのくちびる」とあります。彼らは互いの間で「へつらいのくちびる」を持って話す者たちでした。この「へつらい」というのは「滑らかなことばで話す」ということです。彼らはたとえそれが事実であろうとなかろうと、人々が聞きたいこと、人々が求めていることを話すのです。笑顔を浮かべて、人の機嫌を損ねないように相手が喜ぶことを口では語るのです。しかし、その本心はそのことばとは裏腹に、自分の望むものを手に入れたい、自分がよく思われたいという動機を持っている人物たちでした。このような者たちは自分の話すことばを人が受け入れてくれること、人

が喜んでくれることに快感を置いていたがゆえに、その快感を得るためであれば人を欺くことや人をだますことも仕方がないと、平気でうそを口にする者たちでした。

3) 二心

また三つ目の特徴として、2節の最後に「二心で話します」と書かれています。なぜ彼らが「へつらいのくちびる」を持って話していたのか、なぜ彼らがうそで人をだまそうとしていたのか、それは彼らの心に「二心」——二つの異なる心が存在しているからだと言っています。聖書はこの心とことばとの関係に関して、私たちの発することばが私たちの心から来るものであるということを繰り返し教えています。例えばイエス様もマタイ15:18-19で「しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。」と言われていました。またルカ6:45では「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」とあります。一体ここでイエス様は何を言わんとしていたのでしょうか？簡単にまとめるとすれば、私たちの口から出てくることばは、私たちの心にあるものをただ表しているにすぎないということです。だからこそ私たちの心に怒りがあれば、それが怒りのことばとして私たちの口から出てくることもありますし、私たちの心に満たされない思い、満足していない思いがあれば、それが不満や不平として口から出てくることもあります。

また私たちの心に自分が傷つきたくないとか、自分の正しさを証明したいという思いがあれば、それが自己保身に走ることばや自分を傷つけようとしてくる相手に対する非難のことばとして口から出てくる場合があります。私たちの口から出ることばは、単に私たちの内側にあるものを映し出しているにすぎない。だからこそダビデは困惑していました。私の周りにいる者たちは、うそや偽り、人を欺くことを話すだけではなくて、彼らは時に良いことや正しいことを口にはしている。しかし、彼らの心は本当は別のところにあって、確かに優しいことばを投げかけてくるけれども、彼らの内側は悪に満ち、本当は私を傷つけてだまそうとしている。一見良いことばに見えるけれども、彼らのことばを生み出しているその心は悪に満ちあふれている。だからこそ彼らの言っていることが信頼できない、どうか神様、助けてくださいと。

4) 傲慢 3-4節

そして最後四つ目の特徴が3-4節に書かれています。彼らはおごり高ぶった「傲慢の舌」を持った者たちだったのです。彼らはこのようにことばを口にしていました。「彼らはこう言うのです。『われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。』」と。彼らは自分たちのことばには力があると思っていました。自分たちは何を言っても大丈夫だと。人をだまそうが、人をことばで傷つけようが、自分の誇りを口にしようが誰も自分をさばく者などいない。自分は口が達者で誰にも言い負かされることもないし、誰に対しても自分は思いのままを話すことができる。「だれが、われらの支配者なのか」、誰でもない私たち自身だと。彼らはこうして自分たちの舌に誇りを持ち、そのプライドのまま自分たちの目的のために人々にうそをついたり、こびへつらっていたのです。悪意に満ちたことばをもってダビデを苦しめていました。

そんな状況にダビデが置かれていたからこそ、ダビデは主に「主よ。お救いください」と叫ぶのです。人々はあなたを忘れておごり高ぶり、自分たちにはどんなこともできる、好き勝手に話す権利があると思っ込んでいます。どうかそんな彼らの「へつらいのくちびる」と「傲慢の舌」を断ち切り、そしてあなたに逆らって悪を語っている者たちをさばいてくださいと。ダビデの叫びはシンプルでしたけれども、心の思いをすべて打ち明けたものでした。

さて、ダビデはこうしてうそ、へつらい、二心、傲慢といった四つの特徴を持った人たちのことばによって苦しめられていました。彼が置かれていた状況は今の私たちにも当てはまるものではないでしょうか？私たちの周りを見渡してみても、そこにはさまざまうそがはびこっていたり、ことばによって人と人とが傷つけ合っていたり、裏切られたりすることがあります。また職場や学校、時には家庭の中にあって、あなただけが神様を愛し、みことばに従っていきたいという願いを持ち、あとの人はみんな神様の忌み嫌うことばを口にしていて、その中に置かれた時に、孤独感やプレッシャーを感じたりすることがあるかもしれません。そういった場面にいざ直面すれば、どうしたらいいのだろう。一体何を信じ、何を頼りにして私は生きていけばいいのだろうと思ったことがこれまでにあるかもしれません。もしそのような難しさを覚えたことがあるのであれば、ここでダビデが私たちに教えてくれている大切なことがあなたの励ましになるはずです。ダビデがここで教えてくれていることは、たとえどんな状況に陥ったとしても、私たちはいつも私たちの叫び声を聞いてくださる主にすべてを正直に告白することができるということです。「主よ。お救いください」とダビデが祈ったように、私たちも主に素直に祈ることができる。これまでもさまざまな詩篇を見て来ましたが、必ず悪に正しい報いをされる正しい審判者

である神が私たちとともにいてくださっている。正しい者を必ず守ってくださる、そんな避け所である神が私たちとともにいてくださっている。だからすべてをこの方に委ねて歩いていくことができる。自分の持っている難しい思いや苦しみを祈りをもってこの方に聞いてもらうことができる。皆さん、感謝なことですよ？私たちの責任はどんな時もこの主に信頼し、祈りながら歩いて行くことです。そしてこの生き方に私たちは平安を見出すことができます。

◎ 聖書の教えるゴシップ・陰口とは……

もう一つ考えなければいけないことは、私たち自身の発することばがいつもどのようなものかということに注意しなければいけないということです。私たちの発することばは誰かほかの人にとっての苦しみや悲しみになっていたりはしないでしょうか？また特にキリストのからだをともに築き上げていく教会の兄弟姉妹との間で、一致をもたらすようなことばではなく、分裂を生み出すようなことばを口にしてはいないでしょうか？私たちは皆ことばに関して難しさを覚えています。いろいろなことばで私たちは失敗してしまいますが、恐らくことばに関して私たちが日々の生活の中で最も誘惑を受け、難しさを覚えてしまうもののひとつにゴシップや陰口というものがあると思います。箴言18：8が「陰口をたたく者のことばは、おいしい食べ物ようだ。腹の奥に下っていく。」と言っています。聖書はこの陰口というものが私たちにとって魅力的で、食べてみたいと人を引きつけるおいしい食べ物ようだと言っているのです。だからこそ私たちは悪いとはわかっていながらも、本人のいないところでその人を傷つけるようなことばを発してしまったり、またそういった会話がなされているところに興味がそそられ聞き耳を立ててしまうことがあったりするのです。「ねえ、ねえ、あの話聞いた？」、「これは言うべきではないかもしれませんが、実はね……」と。「これは二人の内緒にしておいてくださいね、実はあの人は……」、こういったことばを実際の会話の中で、また今ではメールやLINEなどさまざまな場所で私たちは耳にしたりすることがあります。そして、人はこういったほかの人のゴシップが大好きなのです。

しかし、聖書はこのゴシップや陰口に関して私たちが覚えておくべき三つの大切なことをはっきりと教えてくれています。

a) ゴシップは神様が憎まれているもの

まず一つ目はゴシップというものは神様が何よりも憎まれるものであるということです。箴言6：16-19に「主の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。高ぶる目、偽りの舌、罪のない者の血を流す手、邪悪な計画を細工する心、悪へ走るに速い足、まやかしを吹聴する偽りの証人、兄弟の間に争いをひき起こす者。」とあります。プライドやうそと並んで「まやかしを吹聴する偽りの証人」を主は忌み嫌っておられるとはっきりと書かれていました。要するに、聖く正しい真理を愛される主の前にゴシップや陰口は立派な罪だということです。

b) ゴシップを聞くことは語ることに同じく間違っている

また二つ目に言えることは、ゴシップを聞くことは語ることに同じく間違っているということです。箴言17：4に「悪を行なう者は邪悪なくちびるに聞き入り、偽り者は人を傷つける舌に耳を傾ける。」と書かれています。もしかしたら皆さんの中にこう思われている方がいるかもしれません。ゴシップや陰口はそれを語る者に問題があるのだと。でも聖書を見れば、ゴシップや陰口は語る者だけでなく聞く者も同様に同じ問題を抱えていると書かれています。ゴシップや陰口を聞こうとする者は、主の前に忌み嫌われる罪を犯しているということです。

c) ゴシップから身を避けることが大切である

最後三つ目に言えることは、ゴシップというものが罪である以上、神が憎まれるものである以上、ゴシップから身を避けることが何よりも大切だということです。箴言26：20に「たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。」と書かれています。もし誰かを傷つけるようなこと、その本人が目の前にいれば決して言えないようなことを隠れて話しているのであれば、どんな言い訳を並べ立てようとも、私たちはその人に対してだけではなく、主に対して罪を犯していることとなります。また、もし誰かが別の人に関して話すありもしないうそをただ聞いていること、たとえ話されている内容が事実であったとしても、その人物の評価を見えないところで傷つけるような会話に耳を傾け続けているのであれば、それも主に対して悔い改めなければいけない罪だということになります。

神様はこのような陰口やゴシップをよしとはされていません。私たちがいつも覚えておくべきことは、イエス・キリストによって救われた私たちは、今はもうキリストをあかしする者として造り変えられているということです。私たちの口はかつては自分の思いを話していましたが、今はもうこの主のすばらしさを感謝することばを発する者として変わったのです。私たちはキリストがいかに大きな愛を示してくださったのか、どれほど大きな赦しを私たちに与えてくださったのかをこの地上においてあかしする者として今を生きています。だからこそいつも自分の口を開く前に、それをどのような動機

で話しているのかにいつも気をつけていなければいけません。私たちが話すことばを聞いて、人々が私たちのうちにキリストを見ることができているのか、それともそうでないものをあかししているのか、そのことをよく考える必要があります。その中であって、もし自分が話そうとしていることが誰かに対するゴシップになるのかわからないということがあったとすれば、このようなことを自分自身に問いかけてみてください。今自分が話そうとしていることが、本人を目の前にしても言うことができるかと。もし本人を目の前にして言うことができないとすれば、私たちは口を閉じる必要があります。

また、もし自分自身が陰口を話す会話に巻き込まれそうになったとすれば、確かにこれは難しいことかもしれませんが、私たちはその会話の内容を変えるように努力したり、この話には私は関われないからほかのことを話しましょうと、正直に話すことが必要になります。私たちが主のために生きている以上、私たちが恐れるべきものは人ではなく神です。そして神の前に陰口やゴシップが罪だと言われているのであれば、私たちはそれを避けることが必要になります。「たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。」と。私たちに与えられた責任はキリストを知る以前のように生きて行くことではありません。この世と同じような生き方をしていく者ではありません。愛するキリストをあかしする者として、愛をもって真理を語る者として成長し続けていくことです。ああ、この人の持っているキリストはなんてすばらしいのだと、そのあかしを私たちは立て上げていくことが必要になります。今私たちはそんなあかしを立てることができているのでしょうか？

B. ダビデに希望を与えることば 5-8節

さて、ここまでダビデが人々のことばによって苦しめられていた様子を見てきました。そんな彼に希望を与えたことばを5節から見ていきたいと思います。

1. 「今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう」 5節

これまで苦しみの中であって主の助けを熱心に求めていたダビデに対して主が答えを与えられています。5節「主は仰せられる。『悩む人が踏みにじられ、貧しい人が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう。』」と。このことばを聞いたダビデはどれほどうれしかったでしょう。正しい者がいなくなり、まるで悪が勝利してしまったかのような暗やみの中に彼は置かれていました。信頼できる者もおらず、ともに主のみことばのすばらしさを分かち合うことができる人もおらず、ただ心に悪意のある者たちが弱い者たちをしいたげ、弱い者たちが傷つけられている姿を彼は目の当たりにしていました。どこを見ても偽りが存在し、いろいろなものに対する疑いや疑念で心を休めることができず、罪にあふれる社会の中でひとり取り残されたかのように感じていたダビデ。神様はこの状況をよしとされているのだろうか、傲慢な者がよい目を見て勝ち誇り、貧しい者の嘆きは聞かれぬのだろうか、神様、どうしてですか、そんな思いを持っていたかもしれません。しかし、彼はその中であって主のことばを聞くのです。私は苦しむ者の叫びを聞いた。貧しい者の悲しみの涙を見た。だから今私はその者たちを悪者の手から救い出そう。私は決して自分のものを忘れることをしない。必ず必要な救いを与えよう。ダビデはこの主に信頼し、そしてこの主がいつもともにいてくださることを覚え、苦しみの中にあっても希望を失うことはありませんでした。

感謝なことは、このダビデの持っていた主がきょう私たちとともにいてくださるということです。この主は今も変わることがありません。主を愛し、主の前を正しく歩む、そのようなものを必ず覚え、必要な助けや力、勇気を必ず与えてくれる方がきょう私たちとともにいてくださる。私たちのうちに力があるから、知恵があるから苦しみや試練を乗り越えられるわけではありません。少し思い返してみてください。私たちは特に旧約聖書の中で「強くあれ。雄々しくあれ。」という命令が繰り返して与えられていることを知っています。しかし、これは何も自分の意思をさらに堅く持つようにということでも、それぞれのうちに逆境を跳ね返すような十分な力があると言っているのでもありませんでした。「強くあれ。雄々しくあれ。」、わたしがともにいる。「強くあれ。雄々しくあれ。」、大いなる主がともに進まれる。「強くあれ。雄々しくあれ。」、「主はみこころにかなうことをされる。」と。必ずみこころにかなったことを成し遂げられる全能の神がともにいてくださることこそが人々に大きな励ましを与えた約束だったのです。私のうちには力はない。でも神がともにいてくださる。だから強くあり、雄々しくあることができる。この主がともにいてくださるからこそ、たとえ人に裏切られて悲しみの中にいたとしても、希望を持って歩むことが可能になるのです。噂や偽りに惑わされ不安を覚えてしまうようなことがあったとしても、私たちは主にあって確信を持って歩むことができるのです。主が私たちをどんな困難からも必ず守ってくださる、そんな拠り所であることを知っているからこそ私たちは揺るがされることなく、確信を持って歩むことができます。

2. 「主のみことばは混じりけのないことば」 6節

また、ダビデが持っていた希望は、単なる彼の主観的な感情、思いに基づいたものではないことを次の6節で言っています。「主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された

銀。」。ダビデが主のことばに全幅の信頼を置くことができた理由は、神様のことばが過ちの一切ない完全なことばだったからでした。ダビデがなぜ主の約束に信頼することができたのか——。それは神様のことばには間違いが一切ない完璧なものであることを知っていたからでした。彼は彼の周りにあふれる人々をだますような偽りのことばと神様のことばを比べた時に、神様のことばが全く異なるものであることをよくわかっていました。彼は特にここで銀を精錬する過程と比較して、主のことばには一切の間違いや汚れが含まれていないということを強調しています。内側にある不純物や汚れやよごれが何度も熱によって取り除かれた銀のように、主のみことばは純粋で混じりけの一切ないものである、そのような確信をダビデは持っていました。ここで完全数である「七」という数字が用いられているのも同じことです。ダビデは主のことばが決して間違えることのない揺るがない完全なものであるということを知っていました。だからこそ主の約束が必ず成し遂げられるということに希望を見出すことができたのです。私にはそんな力はない。でも神のことばは必ず正しいことを成し遂げられると。神の約束は必ず成し遂げられると。だから私はこの神のことばに信頼して歩もうと。

3. 「主よ、彼らをお守りになります」 7節

続く7節にもこんな約束が書かれています。「あなたが、主よ、彼らをお守りになります。あなたはこの時代からとこしえまでも彼らを保たれます。」と。ダビデは主のいつまでも変わることはない守りに確信を置いていました。確かに彼が周りを見渡した時に、たくさんの苦しみがある。でも主はそんな苦しみを味わっている者を助け出し、必要な守りを与えて敵から、また世にあふれているうそから保護してくださいとお方だと。この世において人は変わっていくし、人のことばもころころ変わるし、文化や社会もこの世界にあるあらゆるものが時代とともに変わっていく。でも神のことばだけは決して変わることはない。このことばこそ自分の心に本当の平安をもたらすのに十分なだと彼はよくわかっていました。

ここで忘れてほしくないことは、ダビデの置かれていた状況が何か変わったから、彼が確信を持つことができたわけではありません。彼の周りにはいまだに悪意に満ちたことばがあふれていましたし、彼の周りには信頼できる人はいませんでした。しかしそれでもなおダビデは不安や恐れ、悲しみというものに心が支配されるのではなく、期待にあふれながら主に確信を置いて歩むことができたのです。鍵は主の完全なことばでした。主のみことばが完全なものであるということを彼が知っていたからこそ、そのみことばに信頼する彼の心は喜びであふれていました。今の私たちにとっても同じことです。私たちは周りを見渡せば確かに人を傷つけることばや偽りの情報、プライドや神様のことばに反することを教えるうそ、そういったものは変わらずにいつの時代にあっても世の中にあふれています。そしてもし私たちがその中であって、この世の何かに信頼を置いて歩もうとするのであれば、すぐにその土台は壊れて崩れ去ってしまうのです。何が真実で何が間違いかがわからなくなり、混乱してしまうこともあるでしょう。しかし、私たちには今この神様のことばである聖書が与えられています。決して過ちのない、どんな状況においても左右されることの絶対のない、私たちにとって十分で確かだ信頼できる、そんな完全な聖書が与えられています。

私たちも良く知っているⅡテモテ3：16では「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」と言っています。この箇所が教えてくれているとおり、聖書は人間の著者を用いて神様の息が吹き込まれている、神様の書かれた本です。神様が書かれたからこそ、このみことばには人に罪を示し、そして救いへと導く力が備わっているのです。救われた者が信仰において成長していく上で道しるべとなるものであったり、助けというものがこの中には書かれているわけで、困難や試練を経験する時の私たちにとって必要な慰めや知恵がすべてこの中に記されているのです。揺るぎのない確かなものとしてこの中に書かれています。だからこそたとえどれだけ私たちの頭では理解できないことが周りで起こっていたとしても、私たちがこのみことばを通して知ることができることは、すべての世界を造った創造主である神がすべてのことを支配されているということです。そのことをこの聖書は私たちに教えてくれています。だとしたら、どんな状況に置かれることがあったとしても、私たちはこの主のみことばに信頼し、そしてこのみことばのうちに知恵を見出しながら歩いていくことができます。確かに私の心をざわつかせるようなことが起こったとしても、きょう私には私にとって十分な聖書があると。私を導いてくれる、そのことにおいて完全な神様のことばが私とともにいてくれると。そして何よりこの聖書を書いた神が私たちとともに歩いてくれると。それさえあれば私には十分だ、ほかに必要なものなどないと。この神がいてくれれば、この聖書があれば私には十分だと。

主のことばは真実であるからこそ、すべての約束は必ず成し遂げられます。今は確かにさまざまなことで苦しみにもだえたり、涙する日があるかもしれません。人に裏切られたり、孤立したように感じて先はすべてが真っ暗というようなことに陥るかもしれません。しかし、主が言われていたように、悩む人が踏みめにじられ、貧しい人が嘆く、そのすべてをごらんになってくださっている神が必ず立ち上がる日がやって来る。そしてその時に私たちはこの正しく聖い神が、偽りなど一切ない、真理の神がそ

のみことばに記されているとおりに悪に対して正しく報いてくださる様を見ることになるのです。私たちが覚えておかなければいけないことは、この聖く正しい神は悪を、間違っていることをそのまま放置しておかれる神ではないということです。

ですからもし、この中にまだイエス・キリストを自分の主として、また救い主として認めるのではなくて、自分勝手に生きている方がいるのであれば、こんなみことばは私には関係ありません、神様のさばきは私には関係ありませんとそのようなことを思い自分勝手に生きている方がいるのであれば、どうかきょうその罪を悔い改めて、この神の前に立ち返ってください。これまでの生き方をすべて神様の前に悔い改めて、この主のために生きる新しい人生を始めてください。さばきの日——間違っていることを必ず正される神の前に私たちが立つ日がやって来ます。しかし、同時にこの真理のことばである聖書は、私たちにこのような約束も与えてくれています。ヨハネ3：16に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と。このことばは真実であり、このことばは私たちが信頼できる神のことばです。だから私たちもここに希望があるのです。

さて、最後にダビデはこのようなことばでこの詩篇を締めくくっています。このことばをもって私たちのメッセージも終わりにしたいと思います。8節「人の子の間で、卑しいことがあがめられているときには、悪者が、至る所で横行します。」とあります。この世界はどんな時代にあっても悪が横行し、正しい者がしいたげられ、悪者が勝ち誇ったかのようなことが起こるということをダビデはわかっていました。でも私たちがきょう学んできたように、私たちにはどんな時にも揺らぐことのないみことばが与えられているのです。私たちはこのみことばに立って、どんな時も確信を持って歩んでいくことができます。たとえ周りにうそがはびこっていて、人々が恐れ戸惑っていることがあったとしても、私たちクリスチャンだけがこの主と主のみことばに立って揺るがされることなく歩むことができるのです。皆さん、これは喜びではないでしょうか？もし私たちがこれをすばらしいことだと思うのであれば、私たちに与えられたこのすばらしいみことばがすばらしいものである、そう私たちが思うのであれば、私たちの責任はこの主のすばらしさを、このみことばのすばらしさを、イエス・キリストが私たちになしてくださったその福音のすばらしさを語る者として、真理のことばを語る者として、キリストの使者としてあかしを立てていく必要があるのです。ともにこの主のみことばに立って、そして主をいつも覚えながら歩む信仰者として成長していきましょう。